
しゃべくりトーク！

i z u m i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しゃべくりトーク！

【Nコード】

N5242Z

【作者名】

izumi

【あらすじ】

トーク小説が始まった！！スマブラ&らきすた&オリキャラからの7人が毎回知らされていないゲストたちと一緒にトークを繰り広げる！！ボケあり、ツッコミあり、笑いあり！！とりあえず面白ければ何でもアリ！！っわけでトーク小説、はじまるぞおおおお！！！！！！

挨拶と言つ名の自己紹介（前書き）

新たに始まったこの小説！！

ネタどうしようか…。

挨拶と言つ名の自己紹介

アイク「…何だここは？」

とあるスタジオに集められた7人の…。

こなた「何で逃走中の霧囲気？」

かがみ「…ってか何よ此処…。」

レギュラーたち。

アイク「レギュラー…？」

あれ？地の文の会話聞こえてるみたいだね。

アイク「何だこいつ！？」

マルス「いきなり始まって何ですかこれ？」

ちなみに、今いるのは…。

アイク「俺と。」

マルス「僕と。」

こなた「私と。」

かがみ「あたしと。」

つかさ「私と…。」

涼平「俺と。」

椎名「私です。」

…。

アイク・マルス・こなた・かがみ・つかさ「誰!？」

あ、そいつらは僕のオリキャラの…。

涼平「初めてだね。秋神涼平です。」

椎名「雷文寺椎名です。」

こなた「ふ〜ん、そうなんだ〜。」

かがみ「納得する!？」

マルス「所で…これは何？」

これは新しい小説なんだよ。

アイク「ほお…で、テーマは？」

トーク小説だね。

マルス「で、誰相手にトークするの？」

ゲスト相手に。毎回ゲスト呼んでゲストと一緒に楽しくトークを繰り広げるんだよ。

こなた「まさかゲストは毎回秘密!？」

そうだね。これ元があの番組だから。

こなた「ポジションは？」

それはそちらで決めちゃって!

かがみ「何でだよ!？」

こなた「まあ毎回やればそのうち決まるか。」

涼平「そうだね。」

椎名・かがみ「何でそう受け入れられるの!？」

こなた「じゃあ次回からこのコーナーが始まります。」

椎名「コーナーなのこれ！？コーナー扱いな！？」

アイク「ゲストはさっき聞いたけど毎回秘密だそうだ。」

マルス「さっき言ってたよね！？先ほど聞いたことだよね！？」

つかさ「次回から始まりますので…。」

7人「見て下さい！！」

挨拶と言つ名の自己紹介（後書き）

最初のゲストは…誰だ!?

第1回目(前書き)

一体どうなる第1回目!!

果たして最初のゲストは!?

第1回目

こなた「始まりました〜。」

アイク「もう不安しかないんだが…。」

マルス「全くだね。」

つかさ「あはは…。」

こなた「不安と言えば〜。」

アイク「…。」

マルス「…。」

かがみ「…。」

つかさ「…?」

涼平「…。」

椎名「…。」

…。

こなた「誰も無いの?」

アイク「…では、最初のゲストお呼びいたしましょうか…。」

かがみ「？」

カンペが出されたので確認するかがみん。

かがみ「誰がかがみんだ！」

こなた「照れちゃって。」

かがみ「うるさい！！！」

マルス「僕がカンペ見ましようか…えっと…ゲストの方は3人組だつて。」

アイク「3人組…？」

こなた「ありきたりなパターンだね。」

涼平「もう呼ぶか。」

椎名「そうですね局長。」

アイク「ではゲストの方、この方たちです。」

銀時「よゝテメエら。」

神楽「私たちが呼ばれたアル!!」

新八「よろしくお願いします!!」

登場したのはこの3人だ。

アイク「ゲストは万事屋の3人衆です!」

第1回目のゲスト 『坂田銀時・志村新八・神楽』

銀時「しっかし俺たちが最初のゲストでいいのか?」

マルス「そうだったら帰りますか?」

アイク「まあその方が楽だからな。」

銀時「よっし、じゃあ帰るか。」

神楽「帰って酔昆布たくさん食べるネ!」

銀時・神楽以外「いやいやいやいやいや!!!!!!!!」

新八「此処は「何で帰らないといけないんだよ!」的なノリをする

所でしょう！？何で真に受けているんですか！？」

銀時「いや、帰るかって聞かれたから…。」

アイク「場の空気を読め天パー！！」

銀時「ああん！？誰が天パーだ！！好きでこうなったわけじゃねえからな！！」

マルス「ああもう早く席に座りましょう！！」

かがみ「ゲストは坂田銀時さん、志村新八さん、神楽さんの3人です。」

観客「わああああ！！！！！！」

銀時「なんか…恥ずかしいな…。」

新八「そうですね…。」

神楽「お前ら情けないアルなー。こうゆう時はでかい態度でいるのが基本アルよ。」

涼平「もう少し態度はよくした方がいいぞ。」

かがみ「えーなんか聞きたいことはありませんか？」

アイク「俺聞きたいことがあるな。」

かがみ「んじゃアイクさん！」

アイク「お前らつてさ…バカ？」

銀時「何しよつぱなからとんでもねえ事聞いてんだ！！」

神楽「そうアルね！！」

アイク「いや…巨大エイリアンに向かって白い犬と木刀だけで向かって食われたり、猿に汚いもの投げつけられたり、ご飯に小豆だけやマヨネーズだけかけたり、金色のカブトムシに滅茶苦茶でかいカブトムシで挑んでいたり、ストーカーがいるし、ともかくまとめるとバカだし…。」

銀時「いろいろ言ったあとに酷いこと言うな！！」

マルス「そう聞くとバカしかいないね。」

涼平「バカだな。」

椎名「後変な白い生き物（多分エリザベスのこと）もいるし…。」

つかさ「どんな人たち…？」

かがみ「つかさ、最後のは人じゃないと思うからね。では此処でコーナーに突入します！」

銀時「え？コーナー何かあるの？」

かがみ「ありますよ。」

神楽「どんどこいアル！」

かがみ「では行きます！『質問トーク』！」

そうかがみが叫ぶとスタジオの舞台そこから上の方YesとNoと書かれたボードが出て来た。

新八「何ですかそれ！？」

かがみ「これはメンバーから質問が来るのでそれをYesかNoの二択で答えていただき、Yesと答えた質問に答えていくコーナーです。」

銀時「何だよそりゃ…。」

かがみ「では、メンバー6人にこれを配ってください。」

そして、配られたのはペンと、質問ボードだった。

かがみ「では、質問をお考えください。」

こなた「はい！」

かがみ「え！？早！！」

こなた「まあ最初だから軽〜く行きましょよ。」

涼平「そうだな。」

こなた「質問はこれ!!」

『秋葉原に行きたい?行きたいって言うなら私が案内してあげるよ。』

かがみ「でやああああ!!!!!!!!!!」

ドコッ

こなた「あー!!!!!!」

かがみに思いっつきしツツコミをくらったこなたは前の方に行き…。

こなた「ユニバース!!!!!!」

某アニメのセリフを言った。

かがみ「何それ!?!この質問は無しということだ!!」

新八「教えて下さい!!」

かがみ「うるさいメガネ!!」

新八「メガネって何だよ!!」

アイク「俺行きます。」

かがみ「あーんじゃどうぞ。」

アイク「これならいけるだろ?」

『一番迷惑だと思っ奴は誰?』

銀時「ああ!?!」

かがみ「YesかNoか!」

どっちだ!?!

銀時「…これは、いいんじゃないか?」

Yes

観客「おおー!?!?!?!」

かがみ「Yesですか…?どんな答えが出るんでしょうかね。次!」

つかさ「はい。」

かがみ「つかさ…?どんな質問…?」

つかさ「え〜と…これ。」

『一番楽しかったのってどんなこと?』

かがみ「では、お答えください。」

どっち…!?

銀時「Yes。」

Yes

かがみ「まあそりゃそうよね。」

涼平「俺も行かせろー。」

かがみ「はいはい。質問は?」

涼平「これだ!」

『一番やばいと思った事は?』

涼平「これはいけるだろう!」

かがみ「ではどっち?」

新八「Yesで…。」

Yes

かがみ「Yesですか…では次。」

椎名「私から。」

かがみ「質問何ですか？」

椎名「噂で聞いたことあるんだけど…これどう？」

『新八君って一回ゲームの彼女とキスしたって本当？』

新八「あっ…これは…。」

観客「えええー！！！！？？？」

かがみ「マジ！？さあ答えは！？」

神楽「Yesアル。」

新八「ええ！？此処はNoでしょ！？？」

神楽「黙るアルダメガネ。」

ダメガネ「なんだよダメガネって！！…って名前の所！！作者！！！！！！」

ごめんごめん入力ミスWWW

新八「絶対にわざとだろ…。」

かがみ「この質問でいいですか？じゃあ一つずつ聞いて行きます。」

アイク「まずは『一番迷惑だと思う奴は誰？』か。」

涼平「誰なんですか？」

銀時「俺は…ツラだな。毎回毎回めんどくせえんだよ…。」

こなた「ツラじゃないこなただ！」

新八「何真似してるの！？」

マルス「で、メガネは？」

新八「メガネって言うな！！僕は近藤さんですよ…姉上へのストーカー行為はやめてほしいですよ…。」

椎名「殴られても懲りないねあのクソは。」

新八「クソって…。」

神楽「私はドS野郎アル！！あいついつか…。」

椎名「神楽ちゃん？顔が怖いよ？」

かがみ「次の質問にいきますか？」

新八「一番楽しいことですか？」

銀時「別に無しでいいんじゃないか？」

新八「何ですか!？」

銀時「いや、本当に…。」

神楽「だから新八はいつまでたっても新八なんアルよ。」

新八「何それ!？」

アイク「もう次行くぞ。」

銀時「こつちも無しでいいな。」

新八「何で!？」

銀時「いや、次の事聞きたいだろ？」

全員「…あ…。」

新八「え…何この空気…。」

かがみ「じゃあ次行きましょう!!!」

新八「ちよつとおおおお!!!!!!!!!」

かがみ「これ聞きたいんですけどね…これの真偽は…?」

第1回目（後書き）

次回へ。

第2回目（前書き）

始まったばかりだと言つのに皆さんから感想が来てとっても嬉しいです！

リクエストは行ける範囲までお答えできるように頑張ります！

では、第2回目：始まります！

第2回目

アイク「これで第2回目か…。」

椎名「そうですね…。」

マルス「あれ？何でかがみさんはスカートはいているんですか？」

かがみ「あ、前回の回みたいなスーツ姿ではなく前は前回と同じだが下はスカートになっていた。」

かがみ「あ、これは…。」

つかさ「お姉ちゃんが廊下歩いている時に誰かが向こうから走ってきてその人が持っていたジュースがズボンにかかったから代わりのをはいているんだよ。」

こなた「へえ…。」

涼平「しかし…今日のゲストでも当ててみるか？」

アイク「おっ、いいな。」

こなた「私は希望でハルヒちゃん！」

椎名「私は美琴さんがいいです…！」

つかさ「私は唯ちゃんたちと一緒に楽しいお話がしたいな。」

かがみ「私は誰でもいいわ。」

アイク「肉が好きな人。」

マルス「剣について詳しい人。あと戦いについて…。」

涼平「ドS野郎。」

アイク「前来ただろ。（坂田銀時）」

涼平「ああそうか。」

アイク「しかし…まさか他の作者さんが来るってことは？」

椎名「いやいや無いでしょう！まだ2回目なのに…！」

アイク「そうだよな。」

かがみ「あーもう…グダグダすぎるわよ…。」

マルス「そうだね…ゲスト呼ぶか…。」

かがみ「今回のゲストはこの人です。」

当麻「みなさんどうつ。」「

ガッ

当麻「へ？つてうわあああ！……！！……！！」

ガッシャン……！！

アイク「……今回のゲストは上条当麻さんです。」「

第2回目のゲスト 『上条当麻』

当麻「いてて……あゝ最初っからふ……。」「

かがみ「……ひっ……。」「

椎名「……あ……。」「

こなた「（何やら面白そうな展開になって来たよ）。」「

マルス「……。」「

つかさ「……。」「

涼平「ともかく上条さん…あおむけの状態から普通の状態に戻ろうか。」

アイク「いつまで覗いてんだ？」

かがみ「…ひゃああああ！…！！！」

ドカツ！！！！

かがみ「…ゲストは…上条当麻さんです。」

アイク「さすが不幸野郎、オープニングから不幸全開だな。」

当麻「不幸だ…。」

ちなみに今の上条はかがみに頭を思いつきり蹴られ、大きいたんこぶができています。

こなた「所で色は？」

当麻「そうだな…し」「ドカツ！！」「」

上条に向かって何か飛んできた。飛ばしたのはもちろんかがみだ。

かがみ「何聞いているのよこなた！！！」

こなた「なるほど…白か。」

かがみ「言つな！！！」

アイク「現在たんこぶが雪だるま状態WWW」

マルス「面白WWWあの写真並みにWWW」

俺も笑えるWWW

当麻「ふ…不幸だ…。」

つかさ「それにしても…。」

椎名「幻想殺し（イマジンプレイカー）すごいね…私の電撃も打ち消せるんじゃない？」

当麻「多分消せると思うぞ？」

椎名「マジ…。」

かがみ「もうそろそろコーナーに行っていいますか？」

アイク「OK。」

かがみ「じゃあ行きます。上条当麻の『不幸プロフィール』！！」

すると、舞台そでから何かが出て来た。

かがみ「これは上条当麻さんのプロフィールですが、所々に不幸な出来事が隠されていますのでそれに沿ってトークを広げていこうと言っコーナーです。」

当麻「へいへい。」

かがみ「じゃ、最初に誕生日とか見ていきましようか。」

ペラッ

アイク「へーお前まだ高校生なんだ。」

マルス「あと出身地が神奈川県って…WWW」

当麻「何でここで笑うんだよ!!」

こなた「無能力者（レベル0）なのに幻想殺し（イマジンプレイカー）はあるんだね。」

涼平「父が上条刀夜で母が上条詩菜って言うのか…。」

当麻「はい、そうなんですよ…。」

アイク「母さーん、ご飯はまだかねー？」

こなた「まだですよ〜。」

アイク「もう腹が減って限界なんだよ〜。」

こなた「もう少し待ってください〜い。」

かがみ「…って何コソトしてるの!?!?」

つかさ「私って何…？」

アイク「えーと…。」

かがみ「考えなくていいわ！！！」

当麻「もう次行きますか？」

かがみ「あ、そうですね…じゃあこの「好きなこと」の所でも開けてみましょうか。」

ペラッ

椎名「自虐ネタってWWW何でだよWWW」

アイク「笑うな笑うなWWW」

涼平「いやだってWWWこれ完全にあれじゃんWWW」

涼平は立ち上がり…。

涼平「涼平です…昨日…髪の毛の長い人に出会ったら…真撰組に追いかけられたことです…涼平です…涼平です…涼平です…。」

つかさ「何で〇ロシ？」

涼平「自虐ネタつながりでWWW」

かがみ「…じゃ、次行くか。「ストライクゾーン」。」

アイク「これ当てよう!!」

当麻「へ?」

涼平「当ててみるか。」

かがみ「何でいきなりクイズ大会が始まってるの!？」

アイク「年下で子供っぽい性格のロングヘアの子。」

マルス「同世代でツンデレ。」

こなた「お姉さんっぽいけどたまに甘えてくる子。」

かがみ「もうそこまでいいです!じゃあ答え見ますか…。」

ペラッ

かがみ「へー…年上でお姉さんで、「寮の管理人さん」のような気配りタイプ…。」

アイク「もういいじゃん。そこの所開けて。」

かがみ「では最初の不幸な出来事はこちらです!」

ペラッ

「町のごみ箱に頭から突っ込んだり、ファミレスでコーヒーをこぼされる」

椎名「へーまあまだ序の口ですね。」

かがみ「そうね…。」

当麻「いやいや俺の何を知っているんだよ!」

かがみ「次どうする?」性格「ってとこ…。」

アイク「いららないな。」

当麻「えええええ!?!?!?!?!」

かがみ「じゃ、その下の不幸な出来事開けますか!?!よっ!?!」

ペラッ

「存在を無視される」

かがみ「うわぁ…これはさすがに…。」

アイク「これは不幸だな。」

当麻「そうですね…無事発射寸前のバスにつかと思ったら俺に気付かず行ってしまっつてことも有りますからね…。」

アイク「じゃあ次の「もう一回起こってほしい出来事」ってところを開けて。」

かがみ「年で命令口調なんだよ!?!開けるから待て!?!」

かがみ「そうだね…最後の此処開けましょうか。」

ペラッ

「二千円自販機に入れたけど帰ってこない」

アイク「此処まで不幸なことってないと思う。」

マルス「そうだね。」

当麻「本当に貴重な二千円が…あれで無に…。」

涼平「どんな感じどんな感じ？」

当麻「こう入れるだろ？そしたら何も起きずに…。」

椎名「次元、此処はどうする？」

当麻「何を振ってきているの!？」

椎名「ノリ悪い…。」

かがみ「あ、もうそろそろ時間がやってまいりました!」

当麻「もうですか…早いですね。」

かがみ「どうでしたか？」

当麻「楽しかったですよ。」

かがみ「そうですね。じゃあまた次回お会いしましょう!」

つかさ「またね」

当麻「次回は誰だろうな…」

第2回目（後書き）

次回は誰だ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5242z/>

しゃべくりトーク！

2011年12月18日09時58分発行